

コラム

みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.25

【新しい日常を生きる⑨ ～コロナの時代に死ぬということ～】

今年2月、横浜港に停泊していたクルーズ船でコロナ感染者がでたことを機にじわじわと感染拡大していった新型コロナウイルス。コロナがやってきて初めてのお正月は、またしても自粛を余儀なくされお祝いどころではありませんが仕方がないですね。

先日発表された今年の新語・流行語大賞は、年間大賞に「3密」、トップ3にアベノマスク、アマビエ、オンライン〇〇、鬼滅の刃などコロナ関連のものが多くはいました。

本来ならば暮れの大掃除や年賀状書きに大忙しのはずなのに、残念ながら感染し病院やご自宅で療養中の方もいらっしゃることでしょう。医療介護従事者は依然として緊張の日々が続いていることと思います。お疲れがでる頃だと思いますが、くれぐれもお身体ご自愛ください。

さて、今回のサブタイトルに、「コロナの時代に死ぬということ」と縁起でもないことをあげてしまいました。これは、先日行われたオンライン講座「第27回 浅草かんわネットワーク研究会」（浅草かんわネットワーク研究会/主宰：HAP/共催）で同研究会理事長の廣橋猛医師が講座で使われたものです。ちなみに、廣橋医師は、緩和ケア医として勤務医と在宅医療医の二刀流実践者として有名な方です。

コロナによって、お笑いタレントの志村けんさんや女優の岡江久美子さんが生命を落とされたことは記憶に新しいことと思います。気の毒なことにこの時代に亡くなられた方は、家族が最期にたちあうことができずご遺体に触れることもできず遺骨になった形での対面となりました。コロナ死は、まさに「さよならなき別れ」で死にゆく人やご遺族の無念さを考えると胸がいたみます。

また、病院に入院中の方や老人介護施設などに入居中の家族との面会も制限されています。私も田舎の母が施設にいますが面会はいまだにできません。

生命の時間がもう明日か明後日……に迫っている病院入院中の患者さんはどうでしょうか？ 緩和ケアにたずさわる廣橋医師はこの現状を憂慮し、タブレット端末による終末期患者さんと家族との面会を実施。個人でできるのには限りがあることから、クラウドファンディングを活用すると想定外の支援があり、多くの病院や施設にタブレット面会を普及させることに成功されました。

医療の現場には手術ロボットや治療法を見つけるAI技術が入り込んでいて、病に苦しむ方々に希望を与えています、人生を終えようとしている人にはどうでしょうか？ もう死がみえているのだから、もうできることは何もないから、“その時”がくるのを待つだけというのでは悲しすぎます。自分の望む最期は自分できめたいものです。

高齢者やがんなどの基礎疾患をもっている入院患者は感染リスクが高いから隔離される。

理屈はわかるのですが、あまり時間がないからこそなんとかならないものかと思ってしまう。在宅診療にたずさわりの百人ちかい患者さんを見ている“みやちゃん”こと宮原富士子さんも（↓）のように思いを綴っています。

***** 2020年11月4日 宮原富士子FB投稿 *****

2020年11月4日 私の今のお悩み

高齢者がテレビつけたらWEB会議につながる仕組みを安価で提供できたらいいの。そんなにたくさんインターネット使うわけじゃないから決め打ちで。これが安価で手軽にできるようになったらものすごく広がるし、サービス担当者会議も退院カンファランスも 随時見守りも相談もOKですよねええ。なんでこんな簡単なことが広まらないのか、予算をつけないか、全く不思議でならないのです。オンライン服薬指導もいろんな会社が宣伝にあの手この手って結局質より手数料だしねえ。なんか変な社会だよ。

コロナが終わっても次なる人類の敵がやってきて「〇〇〇の時代」とつけられるのでしょうか。その時に控える必要は医療や介護を受ける側、提供する側、両方にあると思います。

